



妙法寺の有吉佐和子碑



堀之内妙法寺に有吉佐和子氏の碑がある。妙法寺をよく訪れ散歩していた有吉さんを偲んで、舞踊家吾妻徳穂さんらの手によって、建てられたとのこと。

有吉佐和子さんといえば昭和47年（1972年）のベストセラー小説「恍惚の人」が有名である。人は自分の認知を失ったとき、街中を徘徊し、自宅に帰ることさえできなくなる。読み進むうちに頭を何かでゴーンと殴られたように驚き恐ろしくさえ思った。今のように「認知症」という言葉もない時代にこの小説はショッキングなものであった。

「恍惚の人」の題名は戦国時代の武将三好長慶の「老いて病み恍惚として人をしらず」の言葉から発想したものといわれている。ところで、碑は妙法寺の境内の奥まってある日朝堂の左に隣接している。日朝堂には室町時代眼病を患うほどに勉学に精進された日朝上人が奉安され、合格祈願に訪れる人も多い。妙法寺の望月上人によれば、碑は原稿用紙をかたどった四角の台座の中心に鉛筆を模した六角形の棒が中央にあり、作家にちなむものとのこと。

「恍惚の人」では徘徊する老人を見つけ家まで送ってくれるご近所の人々が書き込まれ、地域のぬくもりを感じた。妙法寺の鐘の音が「ウルサイ」との苦情が寄せられる時代に、このぬくもりはまだあるのだろうか。